

ジャンボタニシ対策

＝厳寒期の耕運で越冬数が減少＝

JAグループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田 孝志

【はじめに】

スクミリンゴガイ (俗称:ジャンボタニシ) は南米原産の貝で、1981年に食用目的で初めて台湾から輸入され、水田周辺で養殖が行われるようになりました。その後、養殖業の廃業等により放置され、農業用水路や水田で野生化しました。

現在では、温暖化の影響もあって生息範囲が広がっており、田植え後の水稻被害が増加しています。



ジャンボタニシの成貝



ジャンボタニシによる被害水田

【ジャンボタニシの生態】

成貝の大きさは2～7 cmで、従来から日本に生息しているヒメタニシ等より大型になります。成貝では日本のタニシと見分けが困難ですが、皆様ご存じのように濃いピンク色の卵を産卵するので、すぐに確認できます。

雑食性で、主として植物を食べますが、魚の死体なども食べます。厳寒期は土壌中で越冬し、代かき後に水中に出てきて、稲を食害します。寿命は2～3年で、2年目の産卵期を終えると多くの個体は寿命を迎えます。

卵	濃いピンク色、1卵塊 200～300個 卵には毒が含まれ食害されにくい 25℃では約2週間でふ化 水中ではふ化できない
成長	ふ化後約2か月で繁殖可能となる 雌は3～4日間隔で、3000個以上産卵
食性	藻などの柔らかい植物を好む 30℃付近で摂食量が最も多い 水中にあるものしか食べないので、稲は水中に引き込んで食害
越冬	14℃以下で活動停止、冬季は休眠 土中で越冬するが、地表6cm以内が多い 寒さには比較的弱い
被害地域	冬が寒い「中山間地域」、田植え後が低水温の「早場米地域」では被害が少ない 田植え後が高水温の平坦地で被害大

【冬場の対策】

ジャンボタニシは冬の寒さで多くの貝は死滅しますが、温暖化の影響もあり、越冬する貝が増加しています。殻高1 cm未満の

小さい貝は寒さと乾燥によりほとんど死滅します。また、大きな貝も越冬率は高くありません。殻高1～2cm程度の未成熟貝が最も越冬しやすいようです。

冬場の貝は土壌表面から6cm以内に生息していることが多いので、耕運して貝を寒さにさらすことで多くの貝を死滅させることができます。深く耕耘すると貝は土中深くに移動し、寒さに当たらなくなることもあるので注意します。複数回耕運すると効果が高まります。

【耕運時の注意点】

- 貝を破砕するため、土が硬い状態で耕運
- 速度を遅くして、丁寧に耕運
- 土壌表面のみを耕運
- 1～2月の厳寒期に実施

【田植え後の管理】

ジャンボタニシは柔らかい葉を好んで食べるため、葉数が多いしっかりとした苗を植えると被害が少なくなります。また、田植え後は、水深4cm以下に浅水管理をすることで被害が大幅に軽減されます。水深が深い場所で被害が多いので、丁寧に代かきを行うことも重要です。

このような管理を行っても被害が発生する場合は農薬を散布して被害の軽減を図ります。

ジャンボタニシ登録農薬（防除暦掲載剤）

農薬名	成分（%）	使用量（10アール）
スクミン	メタアルテヒト [®] 10%	1～4kg
ジャンボ [®] たにくん	メタアルテヒト [®] 5%	1～2kg
スクミンバ [®] ト	硫酸第二鉄 3%	2～4kg
キタジンP粒剤	イプロベンホス 17%	3～5kg

稲は5葉以上（田植え後3週間）に大きくなると、ジャンボタニシの食害はほとんどなくなります。

その後、卵塊を水面に落として死滅させたり、貝を捕獲するなどして、ジャンボタニシの密度を低下させることも重要です。レタスやナスなどを用いて「野菜トラップ」を活用する方法もあります。なお、このような方法はジャンボタニシが大量に発生した圃場では効果が限られるので注意して下さい。また、捕獲にあたってはビニル手袋をつけるようにして下さい。

他にも石灰窒素を利用して貝密度を低下させる方法もありますが、現場では難しい面もあるのでここでは省略します。

【まとめ】

和歌山県内では、ジャンボタニシによる水稻被害が増加しています。一つの方法で被害をなくすのは難しいので、様々な方法を駆使して被害を最小限に抑制したいものです。

また、ジャンボタニシの拡散を防ぐため、水田を耕運したトラクターの洗浄にも注意するようにして下さい。

防除のポイント

- 厳寒期の耕耘
- 田植え後の浅水管理
- 適正な農薬使用